

2013年度卒業研究成果に見られる子ども学の研究領域 ～タイトルのテキストマイニングと調査方法の分析から～

土川 洋子・多喜乃 亮介

1. はじめに

白梅学園大学（以下、本学）は、2005年に白梅学園短期大学の一部を改組し、本邦において先駆的に「子ども学」という学問領域を学部名称に用いた四年制大学として、子ども学部子ども学科を発足した。その後、2009年度に発達臨床学科、翌2010年度に家族・地域支援学科を開設し、3学科体制となり、2013年度に初めて子ども学部のすべての学科からそろって卒業生を輩出し、2014年度に子ども学部創立10周年を迎えた。

子ども学とは、子どもを対象とした学問領域でありながら、「子ども」という多義的なキーワードによって学際的な様相を呈する領域である〔白梅学園大学子ども学研究所「子ども学」編集委員会編 2013〕。英語表記では、“Child Science”と“Child Studies”と表記される分野であり、本学では、後者のChild Studiesを用いて、実証科学分野のみならず、より学際的に広域な研究が行える学問領域であるととらえている。

本学の四年制課程は、専門ゼミナール及び卒業論文作成を卒業必修と位置付けて、学生に子ども学領域の研究を課している。2013年度卒業論文は、3学科体制になって初めての全学科からの卒業論文が出そろった年である。

本稿では、2013年度の卒業論文のタイトルおよび抄録を精査し、現在、本学が子ども学をどのような研究領域として位置付けて四年制課程の教育を行ってきたかを振り返り、現状を確認し、これからの本学における子ども学研究の領域の問題点や将来的な展望の資料とする。

2. 対象と方法

(1) 対象

2013年度白梅学園大学卒業論文抄録集に掲載されている論文タイトルおよび抄録

(2) 方法

①「論文タイトル」をテキスト化し、テキストマイニングを用いて、頻出語とその語彙とタイトルの成分対応分析を行う〔松村真宏・三浦麻子 2011〕。テキストマイニングは、フリーソフトKH-Corderを用いる〔樋口耕一 2014〕。

②全タイトルの「抄録」に記載されている「研究方法」を抄録し、「文献研究」「実践研究」「調査研究（質問紙）（インタビュー）」「事例研究」のいずれか（または複数）のカテゴリーに筆者が分類する。研究方法の分類は様々な考え方が現存するが〔日本科学者会議 編 2004〕、上記の内容でおおまかな傾向は大別できると判断した。

3. 結果

(1) 論文タイトルの頻出語の抽出と成分対応分析

分析対象とした抄録は、236本であった。〔3回以上〕用いられている「名詞」と「サ変名詞」の一覧を表1.に示した。児童・障害・ワークショップ・社会・課題という名詞が10回以上用いられ、考察・研究・支援・保育・教育・影響・学習・保護・調査・意識・関係・活動・施設・生活・比較というサ変名詞が10回以上用いられている。

「タイトル」と「頻出名詞」との対応分析を、抽出語（上位60語）の名詞・サ変名詞および「子

ども」「発達臨床」「家族地域支援」というキーワードを強制抽出して、相関係数が最大になる対応の割合に応じたバブルの大きさを表現するバブルプロットを用いて出力した。最少出現回数を「5回以上」とすると、大きく3つの領域に頻出語の対応が見られた(図1)。

(2) 研究方法の分類

抄録に記述されている研究方法を「文献研究(資料)」「実践研究(開発)」「調査研究(質問紙(インタビュー)(観察)(録画)(録音)」「事例研究」のいずれか(または複数)のカテゴリーに分類すると、図2のとおり、文献研究170・調査研究86・質問紙53・インタビュー30・実践研究33・事例研究27であった。

「文献研究」の中には、文献そのものを掘り下げ、文献のみにて論じる後ろ向き研究手法を用いているものと、文献を先行研究文献として取り扱い、調査研究を重ねていく前向き研究手法を用いているものが含まれている。また、「調査研究」の方法は質問紙とインタビューに限らず、録音・録画・観察など様々な方法が重ねられているものもあった。「質問紙調査」の部分には、アンケート、質問用紙など様々な表現がされているものを質問紙調査としてまとめた。「インタビュー調査」の部分には、インタビュー、面接、半構造化面接、半構造化インタビュー、聞き取り、ヒアリングなど様々は表現がされているものをインタビュー面接としてまとめた。

4. 考察

タイトルのテキストマイニング分析

研究とは、オリジナルであることが問われる。すなわち、未知な事象を明らかにする営みであるといえる。したがって、論文のテーマやトピックスが頻出語として抽出されることが不可欠なことではない。しかし、子ども学という新しい分野の研究活動においては、学術用語としてどのようなキーワードが考えられるかという点から精査が必

要であると考えられる。

今回の卒業論文タイトルに見られる頻出語の抽出では、子ども学科・発達臨床学科・家族・地域支援学科それぞれを中心しつつ、子ども学として取り上げられている用語が抽出されてきている。児童・障害・ワークショップ・社会・課題という名詞が10回以上用いられ、考察・研究・支援・保育・教育・影響・学習・保護・調査・意識・関係・活動・施設・生活・比較というサ変名詞が10回以上用いられているという点では、研究論文タイトルであることから、課題・考察・研究・調査などというタイトルとして基本となるものも含まれている。しかし、「保育」「支援」「教育」「学習」「関係」「活動」「生活」などは、子ども学を学ぶ上で不可欠な用語であることが窺える。

テキストマイニングは、文書の電子化に伴い発達したテキストデータを計算機によって定量的に解析して、有用な情報を抽出するための多様な方法の総称である[松村真宏・三浦麻子 2011]。市販のソフトウェアやフリーソフト等、多種多様な方法が提案されている。今回用いた方法は、その中のフリーソフトの一つであり、必ずしもテキストマイニングの全容を網羅した解析には至っていない。

対応分析とは、質的変数(ここではタイトルに出現する名詞・サ変名詞・学科名)に関するクロス集計表をもとにして、行の要素と列の要素の相関係数が最大になるように数量化して、次元縮約を行う方法で、コレスポンデンス分析とも呼ばれる[松村真宏・三浦麻子 2011]。様々なテキストの解析に有効な手段として、さらに検討し、研究、教育に還元させていく必要があることを認識した。

研究方法の分類

研究方法については、あくまで筆者がカテゴリー化した分類によって得られた主観的な抽出であり、テキストマイニングによるものではない。しかし、この限られた分類によってではあるが、

各種文献を読み解き議論を重ねる論理的な研究と調査・実践・事例によって実際に実証を試みる実証研究が混在していることが示唆される。

科学とは、実験や観察に基づく経験的実証性と論理的推論に基づく体系的整合性という考え方や、個別の専門分野から成る学問の総称など多様な解釈がなされる用語である〔日本科学者会議編 2004〕。子ども学においては、その理論構築に際し「対象」「目的」「方法」に対する人文科学から自然科学に至る様々な要素が不可欠であることが推察される。

研究方法の分類は、人文科学・社会科学・自然科学などの学問体系の中で、それぞれが独自に開発し、今なお研究方法も研究の対象となっており、日々進化を続けている〔日本科学者会議編 2004〕。本学の学生が卒業研究に取り組む際に、どのような研究方法を用いて行うことが望ましいか、このような学際的な学問において、卒業研究に至るまでの学修の中で多様な研究アプローチがあることを学ぶ機会が重要であると考えられる。

倫理的配慮

前述した中で、本学の学生の卒業研究には、人を対象として実践・事例・調査などを行う方法を用いていることが確認された。ここでいう対象については、今回精査していないため、タイトルに用いられている単語から推察できることに留まることを踏まえた上で、「子ども」「児童」「障害児」「障害者」「母親」「高齢者」といった単語が抽出されており、こうした人々が対象であることが推察される。この場合、こうした中には、「自らの意思」で研究活動に参加することへの「説明と同意（インフォームドコンセント）」を行えない人々が多く存在する。さらに加えて、「自立困難な状態」である子どもや障害児・者、あるいは認知症などの高齢者などへの調査・介入に際し、どのような手続きで研究への説明と同意を求めるか、子ども学を深化させるためには避けては通れない課題であることが示唆されている。

今回は、抄録のみを対象としているため、具体的なインフォームドコンセントがどのようになされたのかを確認できていない。今後、この点についても精査する必要がある。

5. おわりに

今回の取り組みは、これからの本学における子ども学のあり方を考えていく上での一つの参考資料となるように解析を試みた。

テキストマイニングという方法によって質的なデータを量的に整理することによって、内容分析を行うことで、子ども学を構成するキーワード、さらには専門用語、学術用語を抽出することができる可能性を見出すことができたと言えるだろう。

また、研究方法の分類をみると、本学における子ども学は、その理論構築に際し「対象」「目的」「方法」に対する人文科学から自然科学に至る様々な分野が不可欠であること、また、論理的体系化に関する研究と根拠の実証的な研究が必要であることが示唆された。

しかし、今回はあくまでタイトルのみの分析のため、研究内容の全容を把握しているわけではない。卒業論文の本文すべてをテキストマイニングにかけて分析することにより、初めて本学の子ども学で用いられている用語、対象、方法の実態を定量的に把握したことになる。

これからの本学における子ども学研究教育のあり方や、研究領域は、こうした分析結果の全容を明らかにすることによって、新たな一端を展望できるようになると思われる。既存の学問領域から見だけでは見落とされてしまう側面を汲み上げることにより、多分野、多領域にわたる研究の総合科学としての「子ども学」を総合的に展望し、その内容を深化させていく必要を覚える。継続課題として取り組むこととする。

6. 参考文献

山村文子・森舞子・太尾元美・新居学・井上知美・
内布知美・坂下玲子

“臨床看護師による学会発表演題名の傾向分析
—テキストマイニングの手法を用いて—”

兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀
要, 第 21 [2014]: 75-86

小塩真司

研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・
調査データ解析 東京図書株式会社, 2006

松村真宏・三浦麻子

人文・社会科学のためのテキストマイニング
誠信書房, 2011

石村貞夫

SPSS によるカテゴリカルデータ分析の手順・
東京図書株式会社, 2013

日本科学者会議 編

GUIDEBOOK 研究の方法. リベルタ出版,
2004

白梅学園大学

2013 年度子ども学部卒業論文抄録集

白梅学園大学子ども学部, 2014

白梅学園大学子ども学研究所

「子ども学」編集委員会編 子ども学, 2013

樋口耕一

KH Corder. 2014. <http://khc.sourceforge.net/>,
2014

福井次矢編

臨床研究マスターブック. 医学書院, 2011

表 1 頻出語抽出結果 (3 回以上, 名詞・サ変名詞)

名詞	サ変名詞	タグ	
児童	20 考察	52 子ども	180
障害	14 研究	40 発達臨床	61
ワークショップ	13 支援	32 家族地域	45
社会	11 保育	32	
課題	10 教育	20	
メディア	9 影響	17	
中心	9 学習	14	
母親	9 保護	14	
高齢	8 調査	12	
大学生	8 意識	11	
地域	8 関係	11	
要因	8 活動	10	
絵本	7 施設	10	
現状	7 生活	10	
現代	7 比較	10	
あり方	6 発達	9	
学級	6 子育て	8	
環境	6 授業	8	
福祉	6 介護	7	
文化	6 検討	7	
幼児	6 自立	6	
現場	5 造形	6	
在り方	5 対応	6	
視点	5 変化	6	
事例	5 理解	6	
自己	5 関連	5	
実態	5 行動	5	
世代	5 整理	5	
知的	5 意味	4	
貧困	5 形成	4	
役割	5 交流	4	
幼稚園	5 肯定	4	
アンケート	4 参加	4	
コミュニケ	4 実践	4	
意義	4 分析	4	
育ち	4 サービス	3	
効果	4 演奏	3	
取り組み	4 観察	3	
情報	4 記録	3	
心理	4 虐待	3	
青年	4 経験	3	
対象	4 在宅	3	
働きかけ	4 就労	3	
背景	4 出生	3	
プロセス	3 睡眠	3	
音楽	3 対策	3	
家族	3 着目	3	
家庭	3 登校	3	
学年	3 意識	3	
感情	3 利用	3	
関わり	3		
居場所	3		
場面	3		
性格	3		
通常	3		
電子	3		
特徴	3		
乳幼児	3		
病棟	3		
父子	3		
弁当	3		
遊び	3		
妖怪	3		
理科	3		

図1 「5回以上」の頻出語 対応分析バブルプロット

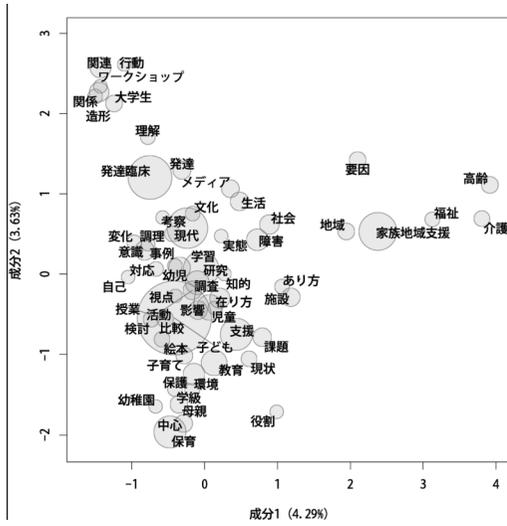


図2 研究方法の種類 (人) (複数選択あり) (n=236)

